

若者の意欲減退雑感

(社) 暮らしのサーチセンター

会 長 福 嶋 等

日本人が勤勉であることは、世界的にも定評のあるところと思われます。この勤勉性は古く遡ります。文献的にはすでに鎌倉時代、現世志向的な新仏教諸宗派の教典などに勤労重視が説かれます。「一所懸命」という言葉も生まれました。こうした思想は、他の仏教国にはみられないものだそうですし、ヨーロッパでも、労働が評価されるのはルネサンスや宗教改革の時代からといわれていますから、それよりも古いわけです。

明治以降の日本における近代化の急速な成功は、この勤労尊重の伝統的な精神風土があったからだといわれてきました。しかし、いま日本人の根性は急速に色褪せてきているのではないか。

世界の主要国を対象にした価値観調査があります。「人生で成功を決めるのは、勤勉かそれとも幸運かコネか」という質問に対し、日本人は、運やコネが大事との回答が1995年調査では20%だったのが、2005年では41%と倍増し、運やコネを重視する価値観の割合が調査22ヶ国中6番目に高いという結果が出ました。しかも20才～30才代では44%余に達しています。このような価値観の変化は、長い間の不況のせいだという経済学者もいますが、2005年の調査時期は、小泉内閣の終盤で、新自由主義の政策の結果、格差が広がった時期と一致していることが注目に値すると考えます。

21世紀に入ってから短期間に変化したと考えられ、若者の5割近くが勤勉の成果に信がおけないという価値観をもつに至ったということです。

勤勉に依拠しない非合理的な生活態度では将来が危惧されます。古代から「万物は闘争から生まれる」などと語り継がれてきましたし、現代の科学も、あらゆる生命は淘汰されるか生き残るかであり、競争はすべての生物の存在様式であることを解明していると思われます。人間も、競争があって存在しているわけです。

ただ競争においては優勝劣敗は必然で、とくにその結果生じる不平等に、人間社会は文明発祥以来心を砕いてきました。人々の中の均等な関係こそが、正義とされ、不平等はすなわち不正であり、社会の掟、法に反するとされてきました。平等が阻まれれば、動乱が起こります。歴史はこのことをくり返し確認してきたのです。近代革命においては、自由と並んで平等の理念が掲げられました。現代風にいえば、競争と社会的公正になりましょうか。

若者が希望と意欲に燃えて競争にいどみ、かつ公正な社会体制も築かれるよう切に望みます。

未聞のグローバル化の時代にあつて、社会の各部署の指導的地位にある皆様方の、競争と結果としての公平、この双方実現の舵取り、調整が極めて重要であります。困難な任務ですが、時代を切り拓いていかれますよう心から御期待申し上げる次第です。

(2010年5月24日総会挨拶)